



内閣府（防災担当）

首都直下地震モデル・被害想定手法検討会（第４回）
相模トラフ沿いの巨大地震等による長周期地震動検討会（第６回）
合同会合
議事要旨について

１．会合の概要

日 時：令和６年１１月１１日（月） １０：００～１２：００

場 所：中央合同庁舎第８号館５階 共用会議室Ｂ（オンライン併用）

出席者：〈首都直下地震モデル・被害想定手法検討会〉

平田座長（兼任）、加藤委員、佐竹委員、津村委員、寺川委員、古村委員（兼任）、
三宅委員（兼任）横田委員

〈相模トラフ沿いの巨大地震等による長周期地震動検討会〉

平田座長（兼任）、入倉委員、北村委員、鈴木委員、久田委員、福和委員、
古村委員（兼任）、翠川委員、三宅委員（兼任）、山崎委員、山中委員

２．議事要旨

事務局から、「本日の検討会について」、「大正関東地震の震度分布の再現計算」、「大正関東地震の長周期地震動の推計」について、資料に基づいて説明を行うとともに、委員間で議論を行った。委員からの主な意見等は次のとおり。

- 統計的グリーン関数法の幾何減衰項の改良については震度分布を再現するために行った一つの「工夫」であり、他の地域等含めて一般的に適用できるものと誤解を与えないよう「改良」ではなくより適切な言葉に変えたほうが良い。
- 統計的グリーン関数法の幾何減衰項の改良について、Love 波の群速度を用いた説明のみでは物理的に十分納得できるものではない。関東平野の基盤の地域性などの観点からの説明を検討してはどうか。
- 地震調査研究推進本部の地盤モデルは、広域を対象としていることや、シミュレーションで重視する視点によりメッシュ内のどの値を代表値とするべきか異なることもあるため、報告書にはそういった点も注意事項として記載すべきである。

- 大正関東地震の長周期地震動の推計結果の妥当性を確認するため、可能であればマグニチュード7クラスの余震についても推計を行い、1倍強震計の余震記録と比較できると良い。
- 破壊伝播速度に揺らぎを与えることで各強震動生成域の破壊開始時間にも揺らぎを与えることをカバーできているのか確認する必要がある。
- 石油タンクの固有周期は長いもので15秒ぐらいまであるので、今回の推計結果が10秒より長い周期についてどの程度適用可能であるかについても注意事項として明記する必要がある。
- 推計結果に見られる特徴的な分布と破壊開始点の違いによる差異の大きさについて、自然現象としてあり得るものなのか、それともシミュレーション上出現するものなのか検討するにあたり、震源からの波の伝播プロセスを動画などで確認してはどうか。
- 海域の深部地盤について、もし可能ならば良いが弾性体に与えた速度を変えた場合の推計結果と比較して影響を確認しておくが良い。
- 揺らぎを与えた推計結果については、どのような揺らぎを与えているのかも丁寧に説明すべきである。

以上